

立命館での多様な「出会い」が、成長を促し、キャリアを形成する。

希望の進路を実現するためには、早い段階から自分の適性や興味を発見し、それをより高度に伸ばす必要があります。個性豊かな学生や教職員が集い、豊富なプログラムや制度が整う立命館大学には、そのきっかけとなる「出会い」が数多くあります。さまざまな「出会い」を通して成長し、自分の適性にあわせてキャリアを形成した先にごそ、将来の道筋は見えてきます。今回は、そうして希望の進路を切りひらいた卒業生と在校生に参加していただき、川口清史総長、中村正教学部長と共に「出会い」の大切さについて語っていただきました。

インターンシップや課外活動 めいっぱいチャレンジした学生時代

中村 最初に卒業生の井上さん、4回生の君嶋さんに、自己紹介と共に立命館大学でどんなことに取り組んだのかを伺いましょう。

井上 私は2005年3月に国際関係学部を卒業し、西日本電信電話株式会社に入社しました。現在は、一般のお客様を対象としたインターネットサービスの開発に携わっています。学生時代は、めいっぱいさまざまなことに挑戦したという思いがありました。1、2回生のときはオリターとして活動し、2、3回生の夏に計3社でインターンシップを経験。また1、3回生で2度、ゼミナール大会に出場したのに加え、学外のビジネスコンテストにも出場しました。さらに3回生からPL（※1）として活動を始め、就職が決まっからはJA（※2）として、現在もCA（※3）として学生の就職をサポートさせていただいています。

君嶋 立命館大学に入学してから3年余り、私がずっと心がけてきたのは、「人に出会

う」ということです。何かに興味を持つと、それに関わる人に積極的にアプローチし、行動につなげてきました。思い出深いのは、京都大学の交響楽団での活動や、外資系企業でのインターンシップ、ニュージーランドへの語学留学、ディベート大会やゼミナール大会、ビジネスコンテストに出場したことなどです。いずれも「人との出会い」が「経験との出会い」へとつながっていったと実感しています。そしてこの春、株式会社リクルートから内定を得ることができました。

人との「出会い」が 大学生生活、キャリア形成のきっかけに

中村 お二人とも実にたくさんの「出会い」を得て、アクティブな大学生活を過ごしたようですね。学生は多様な「出会い」を通して成長し、将来のキャリアを見出していく。私たちはそう考え、数多くの「出会いの場」を提供しています。お二人には成長やキャリア形成の契機となった「人との出会い」がありましたか？

井上 私にとって最初の、そして貴重な出会いの一つが、1回生の基礎演習でオリターの先輩と知り合ったことでした。当時4回生だった先輩は、公共向けのコンサルティングを行う会社への入社を決めたばかり。国際関係学を学び始めていた私は、日本の公共サービスの可能性について語る先輩の話にとっても興味を持ちました。それをきっかけに、「公共」について、経済学の視点を中心に学び始めました。

中村 早い段階からキャリア形成に影響を及ぼすような出会いがあったわけですね。

君嶋 私にとっては、先生との出会いが大きいです。1回生のときから研究室を訪ねては、授業で納得できなかったところや自分で調べたことについて積極的に教えを請うことで、学びを深めることができました。



井上 剛 さん
(いのうえ たけし)

2005年 国際関係学部卒業
西日本電信電話株式会社勤務



立命館大学の先生は、そうした学生のアプローチに対して、とても丁寧に応えてくださいます。2回生のときにゼミナール大会に出場した際にも、授業以外の時間も惜しみなく割いて、調査方法や論理の組み立て方などを指導してくださいました。こうした学びを通して、現在の研究テーマである教育社会学への関心も高まっていきました。先生から得たのは、学問的な知識だけではありません。さまざまな話を伺うなかで、周囲の人に対する思いやりや仲間と協力する大切さも教わりましたね。

多様な「学び合い」を通して 「チームで働く力」を獲得

総長 立命館大学の特長の一つは、非常に多様な人で構成されていることです。全国型の総合大学として出身地域も、価値観も、得意分野もさまざまな学生や、多岐に渡る専門分野の教職員が集まっています。そうした多様な人との出会いを通して、社会の多様性やそのなかでの自分のポジションを認識し、切磋琢磨し、人々と協力して何かを成し遂げる力を獲得していくことができるのです。

経済産業省では、現在「職場や地域社会のなかで、多様な人々と共に仕事を行っていくうえで必要な基礎的な能力」として「社会人基礎力」の重要性を唱えています。社会人基礎力は、さらに「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」と表されます。学生の皆さんには、ぜひ「出会い」を通じてこうした力を育んでほしい。特に「チームで働く力」は、多様な人と接するなかで養われるもの。お二人にはそうした経験がありますか？



川口清史

(かわぐち きよふみ)
立命館総長
立命館大学長

井上 私が「チームで働く」難しさを思い知ったのは、オリターでの活動でした。オリターの主な役割は、1回生の大学生活や学習をサポートすること。活動に際しては、オリター同士で話し合い、どんなサポートをすれば、新入生に充実した学習や大学生活を得てもらえるか、方針を一致させる過程が欠かせません。入団当初から率先して活動に取り組んでいた私は、その姿勢を先輩に評価され、1年後には皆を引っ張る立場になりました。でも当初は、メンバーをうまくまとめることができませんでした。自分のやる気ばかりが先走り、メンバーを思いやる気持ちに欠けていたと気づいたのは、そのときです。皆で何かを成し遂げるには、強いリーダーシップを発揮するだけでは不十分です。一緒に取り組む人の気持ちにも思いを配り、協力し合うことが大切だと学びました。チームで出場したゼミナール大会やビジネスコンテストでも、同じことを実感しましたね。

※1 PL（プレイズメント・リーダー）：就職活動に取り組む3回生のリーダー的存在となり、業界研究会などの企画・運営にも取り組む。
※2 JA（ジュニア・アドバイザー）：就職活動を始める3回生に、就職活動体験に基づく助言・援助を行う内定者（4回生が中心）。
※3 CA（キャリア・アドバイザー）：就職相談に乗ったり、懇談会に出席するなど学生の就職活動を支援する卒業生。



立命館での多様な「出会い」が、成長を促し、キャリアを形成する。

君嶋 私もチームワークについて考えさせられた経験があります。学外での交響楽団の活動のことです。一時は音大を志望したほど真剣にチェロを習ってきた私は、そのテクニックを買われて「日本一」とも言われるこのオーケストラに参加することになりました。けれど待っていたのは、先輩からの厳しい言葉でした。それまでソロとして演奏してきた私の弾き方では、低音で主メロディーを支えるオーケストラのチェロとしては、主張が強すぎるということです。どうやって皆の演奏に溶け込んだらいいのかと悩みました。悪戦苦闘するなかで次第に見えてきたのが、フォロアースHIPの大切さでした。役割の異なる一人ひとりが周囲に目を向け、耳を傾け、お互いを補い合って初めて良い演奏になるとそのとき初めて気づけたのです。

総長 個性は十人十色。その10人で、一つの音を作る。まさにチームで働く上で必要なことを象徴するような経験ですね。「チームで働く力」はさらに6つに分類されます。すなわち「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」「規律性」「ストレスコントロール」です。これらの力をお二人は、それぞれの経験から獲得されたのだと思います。

井上 人とかかわりは一方通行ではないということを知りました。相手をサポートしているようで、むしろ自分自身が学んだり、成長させられることがかなりあります。私は現在もCAとして後輩の就職支援を続けています。就職活動にいそむ後輩に会って、



君嶋円香 さん
(きみしま まどか)
産業社会学部4回生
株式会社リクルート内定

私自身のモチベーションを新たにしたり、勤める会社について再認識することも多いですね。

インターンシップを経験し 仕事へのリアルなイメージをつかむ

総長 私たちが重視するのは、正課や学内での出会いだけではなく。学外で人や物事と接することも奨励し、インターンシップや留学など、社会との連携を強めた教育を推進しています。実際に目で見て、体験して、自分の適性に合った進路選択に結び付けてほしいのです。そして、自らが興味を持ったことに関しては、正課、課外を含めた様々なプログラムを利用して学びを深めてください。立命館大学のプログラムはこれまで皆さんが身につけてきた知識や経験を、「現実を変える力」へと転化する装置となるでしょう。

中村 そうですね。お二人のように学外のビジネスコンテストに出場したり、他大学の課外活動に参加するのも貴重な経験です。その他、インターンシップにも参加したようですね。

井上 私は、2回生の夏に金融機関で、3回生の夏にはコンサルティング会社と商社で、インターンシップを経験しました。コンサルティング会社では、地方自治体を顧客とした仕事に携わりました。当時私は、将来の進路の選択肢として公務員になることも考えていました。しかしインターンシップを通して行政の仕事を知るうち、自分には公務員よりも民間企業の方が合っていると思うように。結果、民間企業で公共のサービス充実に寄与する今の就職先を志すことになったのです。

君嶋 私は3回生のとき、ゼネラルエレクトリック社の日本法人で、3ヶ月間フルタイムのインターンシップを経験しました。世界屈指の大企業の事業を垣間見られると意気込んで臨んだのですが、正直なところ最初は少し拍子抜けしてしまいました。それは、実際の仕事は日常の反復作業の繰り返しでもあると知ったからです。M&Aのような大規模なプロジェクトも、日々の堅実な事務処理やルーティンワークの末に実を結ぶも

の。そのことを身をもって知ったおかげで、就職活動の際にも、冷静に企業を判断することができました。

総長 インターンシップを通じて仕事に対するリアルなイメージをつかむことができたのですね。私たちがインターンシップを勧める理由の多くも、そこにあります。さらに重要なのは、社会での経験を学業にフィードバックすることです。実社会を垣間見て、社会に出る上で自分にどんな知識や能力が不足しているのかがわかり、学習の必要性を再認識する。こうした社会体験と大学での学習の往復が、学びを一層生き生きとしたものにします。

アクティブな経験を知的な学びに還元 「考え抜く力」を培う

中村 アクティブな活動は、ともすれば「やった」という事実だけで充実感を抱きがちです。先ほど総長も言われたように、その活動を知的な活動や学術的な関心の醸成につなげる仕組みを整えていかねばと考えています。インターンシップと研究活動を兼ねた「コーオブ演習」などのプログラムを提供しているのもそのためです。ではお二人は、体験が学びに還元されたという実感を持っていますか？

君嶋 インターンシップで痛感したのが、英語力の必要性でした。外資系企業だったため、上司は外国人。英語で話しかけられて理解できず、悔しい思いを何度もしました。そこでインターンシップを終えた後、2ヶ月間、ニュージーランドの語学学校へ、さらに4ヶ月間ニュージーランド国内を回り、英語力を磨きました。帰国後、学内の英語のディベート大会に出場。チームの他のメンバーにも鍛えられ、英語で論理を組み立て、意見を交わすディベートもできるようになりました。

井上 私の場合、インターンシップの経験は、卒業論文を書く上で非常に役立ちました。卒業論文では、「ニュー・パブリック・マネジメント」をテーマに取り上げました。民間企業で成功した経営手法を行政に適応し、より効率的で質の高い行政サービスを実現する方法について、実際のケース

を調べ、分析を試みました。こうした着想は、地方自治体へのコンサルティングを行う企業でインターンシップをしたことから得たものです。そのほかにもインターンシップだけでなく、オリターでの活動、ゼミナール大会へのチャレンジなど、新しいことに取り組む際には、必ず分からないことにぶつかります。そのたびに本を読んだり、さまざまな媒体から情報を得て知識や方法論を増やすことに努めました。この一連の活動を通じて、論理的な思考力を養うことができたと感じています。今、仕事をする上でも物事を客観的に捉え、論理立てて進めていく力は、大いに生きていますね。

君嶋 私も疑問に思うことが出てきたときは、とことん検証するようにしてきました。これから卒業論文を書く予定。論文作成を通して、論理的に考える力をもっと鍛えたいですね。

総長 「卒業論文を書く」という経験は、非常に意義深いものです。「問題意識を持って仮説を立て、調査や文献研究を通じて論理を組み立て、論証する」といった作業を集中して行う経験は、社会に出てそれほど得られるものではありません。そうした過程を通して「考え抜く力」が身につけていくのです。そういった意味では、大学時代の学びの締めくくりとして学生の皆さんには卒業論文に積極的にチャレンジしてほしいですね。



失敗や挫折を経て成長する まずは何かにチャレンジしよう

中村 先に総長のおっしゃった「前に踏み出す」ことは、決して容易にできるものではありません。それをいとも軽々と実践してきたお二人の原動力は何でしょうか？ 後輩たちにアドバイスをお願いします。

井上 周囲の友人に恵まれたことです。迷ったり、自信をなくしたときはいつも、互いに認め合い、刺激し合える友達から、「チャレンジしてみよう」という勇気をもらうことができました。後輩の皆さんにもぜひ、そんな友人を大学で作ってほしいですね。そして興味を持ったことは、ためらうことなくチャレンジしてください、と伝えたい。失敗してもやり直せるのが学生時代です。立命館には、さまざまなことにチャレンジできる環境が整っています。まずは行動を起こし、大学に自分の「足跡」を残してもらいたいと思います。CAとして、その一步を踏み出す後押しができれば嬉しいです。

君嶋 私も同感です。私は4年間「人に出会おう」と目標を定め、実践してきました。インターンシップも、ゼミナール大会も、自分からアプローチし、経験する機会を自分の手で獲得してきたのです。最初は不安もあります。けれどもできるかどうかは、やってみないとわかりません。だから皆さんも勇気を出して、興味を持ったことに飛び込んでほしいと思います。



【司会】**中村 正**
(なかむら ただし)
教学部長
産業社会学部 教授

総長 私が学生諸君に伝えたいのも、まさにそのことです。チャレンジし、失敗することこそ大切なのです。たくさん壁にぶつかって、挫折を繰り返しながら人は成長するのですから。希望通りの進路選択は、一朝一夕に成し得るものではありません。学生生活を通して、失敗も含めて多くの経験を積むなかで自分を発見し、適性や興味を伸ばしていく。その積み重ねこそが、確実なキャリア形成につながっていくのです。キャリアの世界には「計画された偶然」というひとつの仮説があります。偶然もたらされたように思えることも、実は、自分の意思が反映された結果だとする考え方です。お二人はそれぞれの「出会い」を通して自分を見つめ、自分に合った目標を見出し、それを実現させてきた。現在のお二人は、なるべくしてなった結果といえますね。そうした必然的な道筋をしっかりサポートしていくこと。それも大学の役割だと思っています。

多様な人、多彩な学びのフィールドとの「出会い」を通して成長し、キャリアを形成していけるアリーナ。そこが立命館大学です。皆さんが、立命館大学で、そうした「出会い」を数多く得てくれることを願っています。

中村 これからお二人は、さらにどんな出会いを経験し、成長していくのでしょうか。またぜひステップアップした姿を大学に報告しに戻ってきてください。